

堀口大學詩における恋愛観——母への憧憬を視点として——

小川 桃 枝

はじめに

大正から昭和五十年代にかけての堀口大學の文学活動は、詩歌、翻訳詩、翻訳小説などの創作や、雑誌、新聞投稿欄の選者、文芸雑誌の編集など幅広く、多岐にわたるものであった。その中でも、特に訳詩家、翻訳家として、大正、昭和の文学に大きな影響を与えた。『月下の一群』（第一書房 大14・9）が詩壇に与えた影響は計り知れないものであったと言われている。

大學は、昭和五十四年、「翻訳詩、翻訳文学、及び詩人として日本の文学に貢献^{註1}」したとして文化勲章を受章した。しかしながら、詩人としてではなく、まず訳詩家、翻訳家として評価されたことに対して、少なからず不満を抱いていたようだ。大學は晩年、「僕は詩人なのだ。訳詩家、翻訳家、翻訳家で終わりがたくなかった」と^{註2}と松本和男に語ったという。また、晩年、「大學老詩生」と称している点からも、詩人としてあり続けようとした様子がうかがえる。

大學は戦前『月光とピエロ』（初山書店 大8・1）、『水の面に書いて』（初山書店 大10・9）、『新しき小径』（アールス 大11・4）、『砂の枕』（第一書房 大15・2）、戦後に『人間の歌』（資文館 昭22・5）、『夕の虹』（昭森社 昭32・7）『月かげの虹』（筑摩書房 昭46・8）『消えがての虹』（小沢書店 昭53・11）などの詩集を出している。生涯出版した創作詩集の数は二十冊を超えている。それにもかかわらず、翻訳詩ほど一般に知られておらず、詩壇において十分な評価を得られていたとは言い難い。

大學が、詩人としてそれほど評価されなかった理由として、篠田一士は「訳詩家の陰に隠れてしまったということもあります^{註3}が、その詩風が日本の近代詩の常套とは異なっていたからでもあります」と述べている。「日本の近代詩の常

「套とは異なっていた」詩風について、一概に言うことはできないが、その一つとして、近代詩人たちの自我意識による不安や苦悩の表出といったものは異なり、大學の詩風は甘美で遊戯的な世界を好んでいたという点が挙げられる。特に、エロティックな詩において、この特徴がみられる。

大學は、初期から晩年にかけて、数多くの官能的な詩を創作している。大學は、「エロスの詩人」として、活動を始めた大正末頃から詩人仲間の間で認められていた。また、出版禁止処分にあっても、戦時中においても官能的な詩を作曲することをやめなかった。さらに、「エロスの詩人」とされることに、大學自身誇りをもっていたという。

佐藤春夫が、大學の詩の三大テーマは、一つは詩及び詩人についてであり、二つ目がエロティシズムの世界、三つ目が旅に関するものだとしている。さらに、佐藤春夫以外にも、大學の詩の特徴の一つはエロティシズムにあるとしている者が多く、大學の詩のエロティシズム性^{注4}というものは、注目すべき事柄なのである。

では、大學の詩の中にあるエロティシズム性とはどのようなものであったのだろうか。以下、大學の生涯を幼少期（誕生から尋常小学校入学前まで）、少年期（尋常小学校入学から旧制中学校卒業まで）、青年期（新詩社入社頃から海外交遊前）の三期に分け、根底にある母への憧憬、母の喪失体験がどのように大學の創作の形成要因になったかを考察していく。

一 幼少期

まずは、幼少期における生母政への憧憬についてである。

幼少期において最も有意な女性の存在というのが母親である。母親との関わり方というものが、その後の人生を左右するほどに影響する。例えば、大學と同時代に活躍した室生犀星や萩原朔太郎などの生い立ちからも、生母の存在が後の生き方に深く関わってくるということが見て取れる。

三歳で生母と死別した大學は、母からのぬくもりや温かな言葉がけをわずかな期間しか得られなかった。そのため、母への思慕というものが、詩歌上や人生において重要なテーマとなっていると考えられる。大學は、乳幼児期の体験に

基づく乳房への感覚を、晩年期に至るまで途絶えることなく持ち続けた。すなわち、母との死別が夢見がちな少年の基礎となり、乳房への憧れが生涯ロマンチズムとエロティシズムに身を置く原点となったのだと考えられる。

大學が三歳八ヶ月の時、二十三歳という若さで母は亡くなった。幼少期に生母と死別したことで、大學は母を慕い、その幻を生涯追いつけたのであろう。

やがて母に似た女性に憧れ、多くの女性たちとの間で恋愛体験をもつに至った。そのうえで、女性たちを愛した思い出を詩歌や随筆に書いた。

二十歳前後の短歌では、

影に似る幼けなき日の思ひ出の後を歩む母のまぼろし^{注5}

亡き母の幻こそは眼にみゆれ暗きわが世を咀ふ夜なかに^{注6}

と母は天上人のような幻想的イメージであった。

また、後年になると、

母の声

母は四つの僕を残して世を去った。

若く美しい母だったさうです。

母よ、

僕は尋ねる、

耳の奥に残るあなたの声を、

あなたが世に在られた最後の日、

幼い僕を呼ばれたであらうその最後の声を。

三半器官よ、

耳の奥に住む巻貝よ、

母のいまはの、その声を返へせ。^{註7}

というように、その思いはいっそう高潮している。さらに、晩年期の随筆では、

母は死んでしまった、僕が四つの時だ。母のイメージを保つには僕の目はまだあまりにも幼すぎたようだ。いくらまぶたの裏をにらめても、母の面輪おもわは浮かんで来ない少年のころ、このことが悲しかった。(略)美しい母だったそうだ。このことは僕の身のまわりのおとなたちの話の端で十分に察しがついた。僕はその美しい母の顔が見たくてたまらなかつたものだ。たった一度でいいから、母の顔が見たいと僕はたえず思い続けて育つた。^{註8}

と記している。母への思いは生涯尽きることが無かつたことがうかがえる。他の作品においても、幼くして死別した母への限らない恋慕の情、生母を追い求め続けようとする熱い眼差しが書かれている。^{註9}

大學の女性観の根底には何よりも最初に、亡き母に対する眼差しと意思があり、それがやがて大學の詩歌全体を貫くエロティシズム観の根幹をなすに到る。

二 少年期

次に、少年期における恋慕意識について見ていく。

母の死後、大學と妹は祖母によって養育されることとなる。外交官の父は、常に海外にいるため家にはおらず、大學が七歳のとき、ベルギー人女性と結婚してしまう。このような複雑な状況の中、大學はどのようにして女性観を形成していったのであろうか。随筆「青春の詩情」を主軸として見ていく。

幼少期の密やかな心情について、大學は以下のように記している。

僕は早熟な少年だった。これだけははっきり言える。僕の旧作に『性』と題した一篇がある、

世之介は九歳とかや

わが性よ、うたてかりけり！

七歳はや哀れを知りて

形而下にひと恋ひけらし

というのだ。これはありのままの告白であって、誇張ではない。僕の場合、性の目覚めは五六歳の時だった。マスチュルバシオンもその頃覚えた。快感もエジャキュラシオンも十分にあった。男女が行う房事のこと、受胎や妊娠の理由も、みんなはっきり知っていた。『性』と題するこの四行詩にははっきりした名宛人があった。小学一年に入学した時、唱歌を受持たれたK先生がその人だ。（その頃は音楽とはいわずに唱歌といった。）小柄で薄手の未婚の若い女教師だった。声のきれいな、手足の小さな、美人だった。僕はこの先生が好きでたまらなかつた。好きだといつても、少年らしい無垢なあこがれやなぞではなく、欲情の対象として、はっきり彼女の肉体を恋いしつたのだ。形而下にあこがれたのだ。昼の間は、教室や廊下に彼女の姿を見たり、声を聞いたりするのが慰めでもあり、よるこびでもあったが、夜はよく夢にみた。恋々の情を彼女に打明けて、ゆるされたり拒まれたりした夢だ。そんな夢からさめた夜半には、悶々やる方なく、小さい体で床中を輾転反側したものだ。世間の人はとかく、少年——ことに十歳未満の少年——の肉体や精神は、清浄で無邪気で、肉情の悶えなどあろう筈はないと思つていようだが、僕に言わせると、これは大きな思いすごしだ。彼等の肉体も精神も、成人のそれと同じ穢れに汚れている。

(略) 僕は今、《穢れに汚れている》と書いたが、これは世間の慣用に従ったまでであって、僕自身はあれを決して、穢れとも汚れとも思っていない。それどころか、知識欲道義心なぞと同じく、人間に備わる根元的な性質の一つだと思っている。それは特に清くはないかもしれないが、だからといって決して穢れてなんかいやしない。これを汚穢のものと見たりするのは大きな人間冒瀆だと思う。そればかりか、性を穢れと見ることの習慣から抜け切らない限り、人間の生活から虚偽と偽善が影をひそめることは何時までたっても先ずあるまい。^{註10}

大學本人が言うように、随分と早熟な少年であったことがうかがえる。また、小学一年生の時に恋い焦がれたK先生の容姿を「小柄で薄手」「声のきれいな、手足の小さな、美人」と具体的に挙げ、自分の好みの女性像であると規定しているところは、注目すべき点である。

このことは詩においても、

好愛

旺盛なその肉体をめくり究め……

巨大な膝の斜面によじのぼり……

野末かけ長々と寝ころんだ

その巨女の乳房のかけに

山裾の平和な村にいるような気持になって

のんびりと眠ること

『悪の華』

ポードレールの巨女趣味は
僕にはないね

手も足も小さいがよい

乳房なら蕾の青蓮せいれん

透きとおるアラバスター……

柳腰 ひきちぎれそう

しめり気は多いほどよい注11

としていることからもうかがえる。「小柄で薄手」「声のきれいな、手足の小さな、美人注12」というのがまさに大學の幼少期から晩年に至るまでの、亡き母へ抱き続けてきた永遠の女性像の原型として存在していたのであろう。母の政は写真で見る限り、たしかに小柄で美人であり、それだけにK先生は大學にとつて、母のイメージに色濃く重なる女性であったに違いない。K先生は大學にとつて人生で最初のロマンチックな、さらにエロスの対象となったのである。

さらに、「青春の詩情」においてエロスに対して肯定的な発言をしていることに注目したい。「僕自身はあれを決して、穢れとも汚れとも思つてはいない。それどころか、知識欲道義心なぞと同じく、人間に備わる根元的な性質の一つだと思つているし、(略)性を穢れと見ることの習慣から抜け切らない限り、人間の生活から虚偽と偽善が影をひそめることはない注13」とまで言い切つている。この箇所は、大學のエロティシズム観の一端を述べたものであり、エロスこそ人間の本然的なものだと説く考えは、エロスの肯定とともに恋愛や官能を賛美し、自我解放の歓びを数多く歌つた与謝野晶子と共通するところがある。そのうえで大學は少年期に自らが女教師へ抱いた恋慕体験を、ためらうことなくありのままに述べたのであった。

「青春の詩情」は大學が六十五歳のときのものであり、青年期にグウルモンの詩論にある「エロチシズムなしには、思考は存在しない注14」に感銘を受けて以来、それを自分の詩的立場として見定めてきた大學のエロティシズムの立脚点をこの年齢期において、あらためて確認することができた。

三 青年期

本節では、多感な青年期について見ていく。青年期には新詩社に入門して与謝野鉄幹（寛）や晶子から短歌の指導を受けた。また内に秘めていたものが、文学として表に現れるきっかけとなった時期であった。青年期におけるエロティシズム観として見逃せないのは、吉井勇の短歌との出会いと、与謝野晶子に対する大學の眼差しである。

はじめに、吉井勇の短歌との出会いについて見ていく。大學の女性観の形成において、とりわけ大きな影響を与えたのが吉井勇の短歌であった。

大學が出会った吉井勇の短歌には、「夏のおもひで」（『スバル』第8号 明42・8）と題した一連の作がある。

夏は来ぬ相模の海の南風にわがこころ燃ゆわが瞳燃ゆ

夏の带沙いさごのうへにながながと解きてかこちぬ身さへ細ると

君がため瀟湘湖南の乙女らはわれと遊ばずなりにけるかな

互いに恋愛感情を育くみ、その後に分れる様子がひと夏の思い出として歌われている。全体的には、青春期の感情が湘南の海を背景にノスタルジックに表現されている。

もとよりロマンチックな恋愛世界に対する憧れがあった大學は、吉井勇を通して知った短歌世界が自分の感情表出に最も適しているということは無意識のうちに感じとったのであろう。大學は、明治四十二年の秋以降、短歌を精力的に作っている。約一年半の間に三百首近くにも上る。この頃の短歌の例を挙げると、

やはらかに君がかひなに抱かるる夕の海のうすあかりかな
（「夏のなごり」）^{注15}

あまりにもはげしき恋をもつものか君に驚く我に驚く (「夏のなごり」^{注16})
美しき少年なればゆるされぬ君が心の柵をこゆべく (「夢の歌」^{注17})

などがあり、「夏のなごり」「夢の歌」などで歌われている世界が、吉井勇の「夏のおもひで」にある情景に近いものであることが分かる。さらに、「夏のなごり」という歌題が「夏のおもひで」からインスピレーションを受けていることも明らかである。大學は吉井勇の短歌に接し、そのうえで短歌に自分の理想とする恋愛模様を反映していったのである。さらに、大學は自身の短歌について、

一、二年前から、「スバル」や「三田文学」にずいぶんきわどい短歌や詩をのせて、誰いうとなき「桃色少年」の仇名を誇っていた私でありましたが、何といってもまだ十九。泣いて別れを惜しむほどの恋人もおりませんでした。あれら桃色詩歌はいわば、あこがれ多い多感な少年の情艶のいとなみに対する、こういうものもあるうかという想像と、こうもありたいという念願のあらわれであったといふべきでしょう。^{注18}

と書いている。吉井勇にあこがれて作り始めたころの短歌は現実を詠んだものではなく、願望によつて作られたものであると大學は明らかにしている。この段階では、大學のエロティシズム観は観念的なものにはかならなかったのである。大學は、吉井勇の詩を通してロマンティシズムや優美なエロスの感覚を体得していったのである。

次に、与謝野晶子に対する大學の眼差しについて考察していく。^{注19}大學は、与謝野寛、晶子について何篇かの随筆を書き残している。これらの随筆をもとに見ていくこととする。

云はば私は新詩社の乙弟子でした。(略)大勢ある子供の中でも、親にとつて一番に可愛いのは末の子だと云ふことです。その為に末の子が甘やかされて育つのは、どこの家庭にあつてもさげがたい定法のやうです。私も両先生

に随分甘やかされて育てられたやうです。^{○注20}

とやや自己陶醉的に書く大學は、新詩社の中では一番若いメンバーの一人であり、ある種の特権的な立場を与えられており、そのことを大學自身も十分に承知していたやうだ。大學が「特別に目をかけて頂き」「甘やかして頂いた」と平気で書いたり述べたりできる関係があった。なぜ大學だけが遇されていたのか。これには、父九萬一と与謝野鉄幹との間に特別な事情があったことによる。

日清戦争のさなか、九萬一は外交官初の海外勤務として朝鮮国仁川へ赴任した。その頃京城で韓国政府下の學術教師をしていた与謝野鉄幹は、「暫く父の官舎に起臥なさったことがあり、詩文を通して盟友^{注21}」関係にあった。そして、九萬一が閔妃事件に連座し投獄されたとき、後事を託されたのが鉄幹であった。寂しさをかこっていた鉄幹のもとに、盟友の子である大學が突然入門してきたため、鉄幹は驚くとともに奇縁を喜び、大學に特別の感情を持つに至った。晶子がお茶を運んできたとき、鉄幹は「堀口九萬一君のこれが息子の大學君だ、実に奇縁だ！」と言って引き合わせてくれた^{注22}、それ以降は母が亡くなっていて父が外国常在している大學の身を案じる晶子が、何くれとなく特別に目をかけてくれるようになったという。さらに大學は、

その為かどうか、私は寛先生に対して父に対するやうな、晶子先生に対しては母に対するやうな感情を持っており
ます。私はさきに自分の詩集を御両所に捧げて、「私の詩歌の上の父母である両先生云々」と書いたことがありま
すが、この感情は詩歌の上ばかりではないやうです。^{○注23}

と記している。師弟関係を越え、親と子にも近い間柄であったことがうかがえる。

節の最初に記したやうに、大學は晶子についていくつかの随筆を書き残している。その中では晶子の才能や女性としての魅力などを賛辞を持って記している。「これは、かつて日本が持った、男性女性を通して、最大の天才者の一人で

あった。女詩人としては、いまだ人類に類例のない第一人者であった。(略)万葉古今以来の、日本の歌のしらべの伝統は、晶子にいたって初めて完大成されたのであって、短歌十数世紀の歴史は、一人の晶子を生むための歴史であったとも言い得るのである」と言い切り、「注24晶子先生と肩を並べ得る程の国際級の女性が今日世界に果たして幾人あるでしょう」というように大學は晶子を大いに称賛している。

大學は母に似た女性の典型を晶子の中に見出していたのであろう。晶子を傑出した賢夫人として崇めるような大學の眼差しが見て取れる。

以上のことから、青年期は幼少期や少年期から持ち続けてきた女性への憧れというものが、文学として形成され始めた時期であることが分かる。

大學と女性との関わりについて幼少期、少年期、青年期に分けて見てきた。どの時期においても共通するのは、母に対する憧れである。わずか三歳で母と死別した大學は、母からのぬくもりをわずかな期間しか得ることができなかった。それだけに、母への思慕は拡大していったのであろう。

四 作品における女性賛美

本節では、母の欠落というものがどのように作品に反映されているのかについて考察していく。

まずは大學の根底にある生母への憧れについて見ていく。大學は幼くして生母と死別したことにより、生涯を通して母を熱烈に恋い慕うこととなった。幼少期の母親に甘えたい、抱かれない、愛されたいという男児らしい思いは歳を経るにつれ年上の女性への接近願望となる。例えば、大學は次のような詩を書いている。

温胎の時間

母よ その貴い時間は

本当に在ったのですよ！

あなたの心臓と 僕のそれと

ふたつの心臓が

呼び交わし 鼓動し合った

その貴い時間は

母よ 母よ

そのカダンス

その協和音

そのリズム

母よ 母よ

ついにかえらぬか

八十年前の

あの温胎の時間は

母よ

注26

子と母という関係にも関わらず、肉体的な印象を受ける。生母を母親として崇拝するだけにとどまらず、一人の女性として憧れを抱いているのである。しかし、大學の母への思いは決して叶うことのない願望であり、そのために代替としての対象を常に求めなければならなかった。生母への憧れというものが、恋愛観の基本的理念を作り出していたので

ある。

後に大學は海外交遊を経て、實際的な性愛の虜になる。その中で、観念的で虚構的な恋愛観からの脱皮がなされた。例えば、次のような詩がある。

風景

ああ

うねり 波うち また よれる

ああ美しい やはらかい

牛乳の海に浮いた

日当のいい三角小島

褐色の羊歯がしげつて

やさしい曲線がふつくらと三つに流れ

島のなかほど おお美学の中心

こんもりとした谷間の木影に

島番の一つ家の尖った家根が見えかくれ

桃色の尖った家根が 注27 ああ 見えかくれ

この詩では、大胆なエロティシズムが感じられる。女体美そのものを形象化し、情艶そのものを題材としている。感傷や叙情とは少し異なる、肉体そのもののもつ官能性が優雅に表現されている。

「温胎の時間」に表現されているような、母親という女性への接近願望を、現実の女性に見出したのである。女性の肉体、特に秘所を切り取って取りあげているという点に注目すると、現実の女性に失われた母を重ねるように見受

けられる。大學にとっては失われた故郷へ帰るような感覚であったのであろう。
母の喪失が、女性賛美へと繋がっていったのであった。

おわりに

母への憧憬、母の喪失体験が女性への憧れとなり、大學の創作の基盤となったのであった。エロティシズム観の根源にあるものは、生母の存在であった。幼くして死別した母に対して憧れを抱き続けた。そして、現実の女性に母を見出していったのであった。

詩歌の中で見ることができたのは、幼き頃に失われた聖なる女性への憧れであった。大學は生涯を通して女性との愛の情景、性愛の感動を作品に投影していったのである。

注

- 注1 『朝日新聞』（昭54・10・19）夕刊
注2 松本和男『堀口大学研究資料集第1輯』（松本和男 平18・3）の「はじめに」。
注3 篠田一士『三田の詩人たち』（講談社 平18・1）
注4 『堀口大學詩集』（角川文庫 昭33・10）
注5 堀口大學の短歌『スバル』第3年3号（明44・3）
注6 注5に同じ
注7 堀口大學「母の声」初出、『人間の歌』（寶文館 昭22・5）引用『堀口大学全集1』（小沢書店 昭57・1）
注8 堀口大學「母を語る」初出、『新潟新報』（昭34・5・13）引用『堀口大学全集7』（小沢書店 昭58・9）
注9 堀口大學「最初の記憶」初出、『季節と詩心』（第一書房 昭10・8）、堀口大學「念慈歌」初出、『捨菜籠』（彌生書房 昭47・

7) など

- 注10 堀口大學「青春の詩情」初出『捨菜籠』（彌生書房 昭47・7）引用『堀口大学全集6』（小沢書店 昭57・8）
- 注11 堀口大學「好愛」初出『月かげの虹』（筑摩書房 昭46・8）引用『堀口大学全集1』（小沢書店 昭57・1）
- 注12 注10に同じ
- 注13 注10に同じ
- 注14 堀口大學「ルミ・ド・グウルモン」初出『詩と詩人』（講談社 昭23・10）引用『堀口大学全集6』（小沢書店 昭57・8）
- 注15 堀口大學「夏のなごり」初出『スバル』第2年10号（明43・10）引用『堀口大学全集9』（小沢書店 昭62・12）
- 注16 注18に同じ
- 注17 堀口大學「夢の歌」初出『スバル』第2年12号（明43・12）引用『堀口大学全集9』（小沢書店 昭62・12）
- 注18 堀口大學「わが半生の記―最初の外遊前後」初出『水かがみ』（昭和出版 昭55・6）引用『堀口大学全集6』（小沢書店 昭57・8）
- 注19 堀口大學「晶子肖像」『スバル』第26号（昭31・1）、堀口大學「師恩の記」『秋黄昏』（河出書房 昭55・3）など
- 注20 堀口大學「晶子先生」初出『婦人公論』（大14・7）第10巻第7号 引用『堀口大学全集7』（小沢書店 昭58・9）
- 注21 注18に同じ
- 注22 堀口大學「宿世」初出『日本の詩歌4』（中央公論社 昭43・8）引用『堀口大学全集7』（小沢書店 昭58・9）
- 注23 注19に同じ
- 注24 堀口大學「与謝野晶子」初出『詩と詩人』（講談社 昭23・10）引用『堀口大学全集6』（小沢書店 昭57・8）
- 注25 注24に同じ
- 注26 堀口大學「温胎の時間」初出『消えがての虹』（小沢書店 昭53・11）引用『堀口大学全集1』（小沢書店 昭57・1）
- 注27 堀口大學「風景」初出『新しき小径』（書肆アルス 大11・4）引用『堀口大学全集1』（小沢書店 昭57・1）